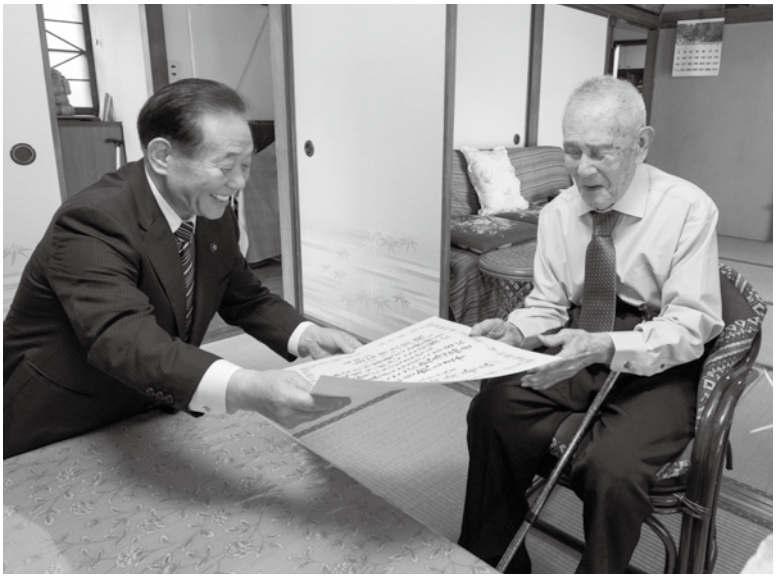
百歳訪問
インタビュー

# 百年生きるということ



市では、敬老の日に合わせ、100歳になる人を訪問しています。今年度は17人の人が100歳になり、100歳以上の人が62人になります。（8月末現在）

今年は藤田市長が紫に住む白石研次郎さんを訪問し、お祝い状や記念品を贈呈しました。

訪問した際、研次郎さんとご家族にお話を伺いましたので紹介します。

大正8年生まれの白石 研次郎さんは来年の1月で100歳を迎えます。若い頃は決して体が強いわけではなく、これほど長生きできるとは思っていなかったと研次郎さんは話します。

戦時中は無線通信士としてタンカーに乗り、東南アジアや南米から石油を運びました。敵軍の潜水艦から魚雷で攻撃されることもたびたびあったそうです。

「水煙が見えると、魚雷だと分かります。命中せずに通り過ぎると、みんなで万歳と喜んだものです」と、その記憶はとても鮮明で、懐かしそうに語ります。

終戦後は、愛妻と2人の子どもに囲まれ、幸せな家庭を築きました。家族でどんたくや山笠、放生会などに出かけるのが恒例行事。同居する長女の小夜子さんは「父は感情的にならず、叱られたことがありません」と話します。穏やかで優しい性格も長寿の秘訣の一つかもしれません。

定年退職した後は登山やウォーキングを楽しみ、89歳になるまで天拝山に登りました。

研次郎さんは緑内障で視力を失いました。しかし、決してマイナス思考にならず、前を向きます。

「私は目は見えなくなりましたが、耳は聞こえます。子どもや、孫、ひ孫とわいわいおしゃべりをするのが本当に楽しい」と話す研次郎さん。無線室で機械と向き合う時間が長かったため、何気ないおしゃべりがとても幸せに感じられるのだとか。

11月には10人目となるひ孫が誕生予定。また、楽しい話題が増えることになりそうです。

今後の目標を聞くと「2年後の2020年東京オリンピックを楽しみにしています」と答えてくれました。その時きっと、テレビの前ではたくさんの家族が研次郎さんを囲んでいるのでしょう。わいわいと、おしゃべりをしながら。

**写真の説明**

右）8月には子、孫、ひ孫が集まり研次郎さんを祝いました。

左）87歳で先立たれた愛妻の絹子さんの写真と一緒に。